



冬 空

永田 恵美
(福岡)

校庭が世界の半分だったころ空まで飛んでた青いブランコ

「再発をしやすい人」といふ医師の短い言葉が呪縛となりぬ

看護師の愚痴をタオル一枚の裸で聞いている検査室1

もうわたしダメかもしれぬさう思ひながら眠って死なず目が覚む

心配をしても心配しなくても結果は一緒 深呼吸する

評判の愛と正義の映画見るやつぱり途中で眠ってしまふ

ペーパーのゴールド免許をありがたくいただき帰るバス停は雨

免許証の無愛想写真がだんだんと最晩年の母に似てくる

ゆすりたかり心中ものが並びある正月歌舞伎春の演目

冬空に風船が飛ぶ私だつて風船だった記憶はあるんだ

上を向いて戦後を生きて来たけれど見上げる夜に星が見えない

伊賀者の忍者になつて甲賀者のあなたに会ひたいウルフムーンは

花束は三輪でいい多ければどれもおんなじ固まりになる

「ああ雲がながれている」と師が講義とめてみんなで眺めた冬空

ビル街の四角い空の彼方から贖罪のごと雪が降りくる

このごろの私

5年前県外から博多に引越して来て、まだ慣れないうちにコロナが流行り、ほぼ歩いて行ける範囲内で生活してきました。いまイベントも復活してきた博多の街を探索するのがマイブームです。



あふれるひかり

人見 江一

(神奈川)

このごろの私
短歌は三年前に始めたばかりだが、風景写真の教室には十数年前から通っている。短歌と写真は私の中で相互に関連している。撮影した光景を歌に詠み、歌に合わせて写真を撮ることもある。

天空にあふれるひかりコスモスの花透過して地に降り注ぐ

「釈迦堂に光は射していましたか」老カメラマン吾に尋ねる

諦めずボールを追って折り返し碧あおに繋いだ三苦のアシスト

PKを外した記憶蘇るワールドカップのクロアチア戦

数珠玉は休耕田の畦道に実を蓄えて遊ぶ子を待つ

冬扇ふゆあうぎという名のネギが農協のテントに並ぶ木枯らしの朝

端正な篠の字残る図書館の『残すべき歌論』の見開きに

啄木もゴッホもポーもメンデルも死後評価されその名を残す

心しんを病むゴッホの描く糸杉は星空よりも暗くそびえる

ひと枝に紅、白、絞り咲き分けて「思いのまま」に生きるのもよし

晩年の父が好みし赤ワイン父に代わって生まれ日に飲む

街頭で統一教会の青年に誘われし吾は受験生なりき

予報士が棒あやつれば寒気団進むも退くも思いのままに

AIの声がニュースを読みあげる気が付かぬうちこんな時代が

永遠の命求めた始皇帝死後も兵馬を付き従えて